

若菜集（島崎藤村）

こゝろなきうたのしらべは

ひとふさのぶだうのごとし

なさけあるてもつまれて

あたゝかきさけとなるらむ

ぶだうだなふかくかゝれる

むらさきのそれにあらねど

こゝろあるひとのなさけに

かげにおくふさのみつよつ

そはうたのわかきゆゑなり

あぢはひもいろもあさくて

おほかたはかみてすつべき

うたゝねのゆめのそらごと

秋の思

風の来て弾く琴の音に
青き葡萄は紫の
自然の酒とかはりけり

秋は来ぬ

秋は来ぬ

おくれさきだつ秋草も

みな夕霜のおきどころ

笑ひの酒を悲みの

盃にこそつぐべけれ

秋は来ぬ

秋は来ぬ

くさきも紅葉するものを

たれかは秋に酔はざらめ

智恵あり顔のさみしさに

君笛を吹けわれはうたはむ

林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の実に
人こひ初めしはじめなり

わがこゝろなきためいきの

その髪の毛にかゝるとき

たのしき恋の盃を

君が情に酌みしかな

林檎畑の樹の下に

おのづからなる細道は

誰が踏みそめしかたみぞと

問ひたまふこそこひしけれ

狐のわざ

庭にかくるゝ小狐の

人なきときに夜いでて

秋の葡萄の樹の影に
しのびてぬすむつゆのふさ

恋は狐にあらねども

君は葡萄にあらねども

人しれずこそ忍びいで

君をぬすめる吾心

秋は来ぬ

秋は来ぬ

まだあげ初めし前髪の

林檎のもとに見えしとき

前にさしたる花櫛の

花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて

秋は来ぬ

秋は来ぬ

髪を洗へば

髪を洗へば紫の
小草のまへに色みえて
足をあぐれば花鳥の
われに随ふ風情あり

目にながむれば彩雲の
まきてはひらく絵巻物
手にとる酒は美酒の
若き愁をたふふめり

耳をたつれば歌神の
きたりて玉の簫を吹き
口をひらけばうたびとの
一ふしわれはこひうたふ

あゝかくまでにあやしくも
熱きこゝろのわれなれど
われをし君のこひしたふ
その涙にはおよばじな

君がこゝろは

君がこゝろは蟋蟀の
風にさそはれ鳴くごとく

朝影清き花草に
惜しき涙をそぐらむ

それかきならす玉琴の
一つの糸のさはりさへ
君がこゝろにかぎりなき
しらべとこそはきこゆめれ

あゝなどかくは触れやすき
君が優しき心もて
かくばかりなる吾こひに
触れたまはぬぞ恨みなる

傘のうち

二人してさす一張の
傘に姿をつゝむとも
情の雨のふりしきり
かわく間もなきたもとな

顔と顔をうちよせて
あゆむとすればなつかしや
梅花の油黒髪の
乱れて匂ふ傘のうち

恋の一雨ぬれまさり

ぬれてこひしき夢の間や
染めてぞ燃ゆる紅絹うらの
雨になやめる足まとひ

歌ふをきけば梅川よ
しばし情を捨てよかし
いづこも恋に戯れて
それ忠兵衛の夢がたり

こひしき雨よふらばふれ
秋の入日の照りそひて
傘の涙を乾さぬ間に
手に手をとりにて行きて帰らじ

秋に隠れて

わが手に植ゑし白菊の
おのづからなる時くれれば
一もと花の暮陰に
秋に隠れて窓にさくなり

知るや君

こゝろもあらぬ秋鳥の
声にもれくる一ふしを
知るや君

深くも澄める朝潮の
底にかくる、真珠を

知るや君

あやめもしらぬやみの夜に
静にうごく星くづを

知るや君

まだ弾きも見ぬをとめこの
胸にひそめる琴の音を

知るや君

秋風の歌

さびしさはいつともわかぬ山里に

尾花みだれて秋かぜぞふく

しづかにきたる秋風の

西の海より吹き起り

舞ひたちさわぐ白雲の

飛びて行くへも見ゆるかな

暮影高く秋は黄の

桐の梢の琴の音に

そのおとなひを聞くときは

風のきたると知られけり

ゆふべ西風吹き落ちて

あさ秋の葉の窓に入り

あさ秋風の吹きよせて

ゆふべの鶉巢に隠る

ふりさけ見れば青山も

色はもみぢに染めかへて

霜葉をかへす秋風の

空の明鏡にあらはれぬ

清しいかなや西風の

まづ秋の葉を吹けるとき

さびしいかなや秋風の

かのもみぢ葉にきたるとき

道を伝ふる婆羅門の

西に東に散るごとく

吹き漂蕩す秋風に

飄り行く木の葉かな

朝羽うちふる鷺鷹の

明闇天をゆくごとく

いたくも吹ける秋風の

羽に声あり力あり

見ればかしこし西風の

山の木の葉をはらふとき

悲しいかなや秋風の

秋の百葉を落すとき

人は利剣を振へども

げにかぞふればかぎりあり

舌は時世をのゝしるも

声はたちまち滅ぶめり

高くも烈し野も山も

息吹まどはす秋風よ

世をかれぐとなすまでは

吹きも休むべきけはひなし

あゝうらさびし天地の

壺の中なる秋の日や

落葉と共に飄る

風の行衛を誰か知る

雲のゆくへ

庭にたちいでたゞひとり

秋海棠の花を分け

空ながむれば行く雲の

更に秘密を聞くかな

小詩二首

一

ゆふぐれしづかに
 ゆめみんとて
 よのわづらひより
 しばしのがる
 きみよりほかには
 しるものなき
 花かげにゆきて
 こひを泣きぬ
 すぎこしゆめぢを
 おもひみるに
 こひこそつみなれ
 つみこそこひ
 いのりもつとめも
 このつみゆゑ
 たのしきそのへと
 われはゆかじ

なつかしき君と

てをたづさへ

くらき冥府よみまでも

かけりゆかん

二

しづかにてらせる
 月のひかりの
 などか絶間なく
 ものおもはする
 さやけきそのかけ
 こゑはなくとも
 みるひとの胸に
 忍び入るなり
 なさけは説とくとも
 なさけをしらぬ
 うきよのほかにも
 朽くちゆくわがみ
 あかさぬおもひと
 この月かけと
 いづれか声なき
 いづれかなしき

強敵

一つの花に蝶ちようと蜘蛛くも

小蜘蛛は花を守り顔まも

小蝶は花に酔ひ顔に

舞へどもくすべぞなき

花は小蜘蛛のためならば

小蝶の舞をいかにせむ

花は小蝶のためならば

小蜘蛛の糸をいかにせむ

やがて一つの花散りて

小蜘蛛はそこに眠れども

羽翼つばさも軽き小蝶こそ

いづこともなくうせにけれ

別離

人妻をしたへる男の山に登り其

女の家を望み見てうたへるうた

誰たれかとゞめん旅人たびとの

あすは雲間くもまに隠るゝを

誰か聞くらん旅人の

あすは別れと告げましを

清き恋とや片し貝

われのみものを思ふより

恋はあふれて濁るとも

君に涙をかけましを

人妻恋ふる悲しさを

君がなさに知りもせば

せめてはわれを罪人と

呼びたまふこそうれしけれ

あやめもしらぬ憂しや身は

くるしきこひの牢獄より

罪の鞭責をのがれいで

こひて死なんと思ふなり

誰かは花をたづねざる

誰かは色彩に迷はざる

誰かは前にさける見て

花を摘まんと思はざる

恋の花にも戯るゝ

嫉妬の蝶の身ぞつらき

二つの羽もをれくて

翼の色はあせにけり

人の命を春の夜の

夢といふこそうれしけれ

夢よりもいやく深き

われに思ひのあるものを

梅の花さくころほひは

蓮さかばやと思ひわび

蓮の花さくころほひは

萩さかばやと思ふかな

待つまも早く秋は来て

わが踏む道に萩さけど

濁りて待てる吾恋は

清き怨となりにけり

望郷

寺をのがれいでたる僧のうたひ

しそのうた

いざさらば

これをこの世のわかれぞと

のがれいでては住みなれし

御寺の蔵裏の白壁の

眼にもふたたび見ゆるかな

いざさらば

住めば仏のやどりさへ

火炎の宅となるものを

なぐさめもなき心より

流れて落つる涙かな

いざさらば

心の油濁るとも

ともしびたかくかきおこし

なさは熱くもゆる火の

こひしき塵にわれは焼けなむ

二 六人の処女

おえふ

処女ぞ経ぬるおほかたの
われは夢路を越えてけり
わが世の坂にふりかへり
いく山河をながむれば

水静かなる江戸川の
ながれの岸にうまれいで
岸の桜の花影に
われは処女となりにけり

都鳥浮く大川に
流れてそゞく川添の
白葦さく若草に
夢多かりし吾身かな

雲むらさきの九重の
大宮内につかへして
清涼殿の春の夜の
月の光に照らされつ

雲を彫め濤を刻り
霞をうかべ日をまねく
玉の台の欄干に
かゝるゆふべの春の雨

さばかり高き人の世の
耀くさまを目にも見て
ときめきたまふさまぐの
ひとりのころもの香をかげり

きらめき初むる暁星の
あしたの空に動くごと
あたりの光きゆるまで
さかえの人のさまも見き

天つみそらを渡る日の
影かたぶけるごとくにて
名の夕暮に消えて行く
秀でし人の末路も見き

春しづかなる御園生の
花に隠れて人を哭き
秋のひかりの窓に倚り
夕雲とほき友を恋ふ

ひとりの姉をうしなひて

大宮内の門を出で
けふ江戸川に来て見れば
秋はさみしきながめかな

桜の霜葉黄に落ちて
ゆきてかへらぬ江戸川や
流れゆく水静かにて
あゆみは遅きわがおもひ

おのれも知らず世を經れば
若き命に堪へかねて
岸のほとりの草を藉き
微笑みて泣く吾身かな

おきぬ

みそらをかける猛鷲の
人の処女の身に落ちて
花の姿に宿かれば
風雨に渴き雲に饑ゑ
天翅るべき術をのみ
願ふ心のなかれとて
黒髪長き吾身こそ
うまれながらの盲目なれ

芙蓉を前の身とすれば

涙は秋の花の露

小琴を前の身とすれば
愁は細き糸の音

いま前の世は鷺の身の
処女にあまる羽翼かな

あゝあるときは吾心

あらゆるものをなげうちて

世はあぢきなき浅茅生の

茂れる宿と思ひなし

身は術もなき蟋蟀の

夜の野草にはひめぐり

たゞいたづらに音をたてて

うたをうたふと思ふかな

色にわが身をあたふれば

処女のこゝろ鳥となり

恋に心をあたふれば

鳥の姿は処女にて

処女ながらも空の鳥

猛鷲ながら人の身の

天と地とに迷ひある

身の定めこそ悲しけれ

おさよ

潮さみしき荒磯の

巖陰われは生れけり

あしたゆふべの白駒と

故郷遠きものおもひ

をかしくものに狂へりと

われをいふらし世のひとの

げに狂はしの身なるべき

この年までの処女とは

うれひは深く手もたゆく

むすぼほれたるわが思

流れて熱きわがなみだ

やすむときなきわがこゝろ

乱れてものに狂ひよる

心を笛の音に吹かん

笛をとる手は火にもえて

うちふるひけり十の指

音にこそ渴け口唇の
笛を尋ぬる風情あり

はげしく深きためいきに
笛の小竹や曇るらん

髪は乱れて落つるとも

まづ吹き入るゝ氣息を聴け

力をこめし一ふしに

黄楊のさし榎落ちてけり

吹けば流るゝ流るれば

笛吹き洗ふわが涙

短き笛の節の間も

長き思のなからずや

七つの情声を得て

音をこそきかめ歌神も

われ喜を吹くときは

鳥も梢に音をとゞめ

怒をわれの吹くときは

瀬を行く魚も淵にあり

われ哀を吹くときは
獅子も涙をそぐらむ

われ楽を吹くときは
虫も鳴く音をやめつらむ

愛のこゝろを吹くときは
流るゝ水のたち帰り

悪をわれの吹くときは
散り行く花も止りて

慾の思を吹くときは
心の間の響あり

うたへ浮世の一ふしは
笛の夢路のものぐるひ

くるしむなかれ吾友よ
しばしは笛の音に帰れ

落つる涙をぬぐひきて
静かにきゝね吾笛を

おくめ

こひしきまゝに家を出で
こゝの岸よりかの岸へ
越えましものと来て見れば
千鳥鳴くなり夕まぐれ

こひには親も捨てはてて
やむよしもなき胸の火や
鬢の毛を吹く河風よ
せめてあはれと思へかし

河波暗く瀬を早み
流れて巖に砕くるも
君を思へば絶間なき
恋の火炎に乾くべし

きのふの雨の小休なく
水嵩や高くまさるとも
よひくゝになくわがこひの
涙の滝におよばじな

しりたまはずやわがこひは
花鳥の絵にあらじかし
空鏡の印象砂の文字

梢の風の音にあらじ

しりたまはずやわがこひは
雄々しき君の手に触れて
嗚呼口紅をその口に
君にうつさでやむべきや

恋は吾身の社にて
君は社の神なれば
君の祭壇の上ならで
なににいのちを捧げまし

砕かば砕け河波よ
われに命はあるものを
河波高く泳ぎ行き
ひとりの神にこがれなん

心のみかは手も足も
吾身はすべて火炎なり
思ひ乱れて嗚呼恋の
千筋の髪に波に流るゝ

おつた

花仄見ゆる春の夜の
すがたに似たる吾命

朧おぼろ 々に父母ちちははは

二つの影と消えうせて
世みなしに孤児の吾身こそ
影より出でし影なれや
たすけもあらぬ今は身は
若ひじりき聖ひじりに救はれて
人なつかしき前髪まへがみの
処女をとめとこそはなりにけれ

若ひじりき聖ひじりののたまはく
時をし待たむ君ならば
かの柿の実をとるなけれ
かくいひたまふうれしさに
ことしの秋もはや深し
まづその秋を見よやとて
聖くちひるに柿をすゝむれば
その口唇くちひるにふれたまひ
かくも色よき柿ならば
などかは早くわれに告げこぬ

若ひじりき聖ひじりののたまはく
人の命いのちの惜をしからは
嗚呼ああかの酒を飲むなけれ
かくいひたまふうれしさに
酒なぐさめの一つなり
まづその春を見よやとて

聖ひじりに酒をすゝむれば
夢の心地に酔ひたまひ
かくも樂しき酒ならば
などかは早くわれに告げこぬ

若ひじりき聖ひじりののたまはく
道行き急ぐ君ならば
迷ひの歌をきくなけれ
かくいひたまふうれしさに
歌も心の姿なり

まづその声をきけやとて
一ふしうたひいでければ
聖たまは魂たまも酔ひたまひ
かくも樂しき歌ならば
などかは早くわれに告げこぬ

若ひじりき聖ひじりののたまはく
まことをさぐる吾身なり
道の迷まよひとなるなけれ
かくいひたまふうれしさに
情なさけも道の一つなり

かゝる思おもひを見よやとて
わがこの胸に指させば
聖ひじりは早く恋ひわたり
かくも樂しき恋ならば
などかは早くわれに告げこぬ

それ秋の日の夕まぐれ
そゞろあるきのこゝろなく
ふと目に入るを手にとれば
雪より白き小石なり
若ひじりき聖ひじりののたまはく
智恵の石とやこれぞこの
あまりに惜しき色なれば
人に隠して今も放はなたじ

おきく

くろかみながく
やはらかき
をんなごころを
たれかしる

をとこのかたる
ことのはを
まこととおもふ
ことなけれ

をとめごころの
あさくのみ
いひもつたふる
をかしさや

みだれてながき
鬢びんの毛を
黄楊つげの小櫛をくしに

かきあげよ

あゝ月つきぐさの

きえぬべき

こひもするとは

たがことば

こひて死なんと

よみいでし

あつきなさは

誰たがうたぞ

みちのためには

ちをながし

くには死ぬる

をとこあり

治兵衛はいづれ

恋こひか名か

忠兵衛も名の

ために果はつ

あゝむかしより

こひ死にし

をとこのありと

しるや君

をんなごころは

いやさらに

ふかきなさけの

こもるかな

小春はこひに

ちをながし

梅川こひの

ために死ぬ

お七はこひの

ために焼け

高尾はこひの

ために果つ

かなしからずや

清姫は

蛇へびとなれるも

こひゆゑに

やさしからずや

佐容姫さよひめは

石となれるも

こひゆゑに

をとこのこひの

たはぶれは

たびにすてゆく

なさけのみ

こひするなかれ

をとめごよ

かなしむなかれ

わがともよ

こひするときと

かなしみと

いづれかながき

いづれみじかき

三 生のあけぼの

草枕

夕波くらく啼く千鳥
われは千鳥にあらねども
心の羽をうちふりて
さみしきかたに飛べるかな

若き心の一筋に
なぐさめもなくなげきわび
胸の氷のむすぼれて
とけて涙となりにけり

蘆葉を洗ふ白波の
流れて巖を出づること
思ひあまりて草枕
まくらのかずの今いくつ
かなしいかなや人の身の
なきなぐさめを尋ね侘び
道なき森に分け入りて
などなき道をもとむらん

われもそれかやうれひかや
野末に山に谷蔭に
見るよしもなき朝夕の
光もなくて秋暮れぬ

想も薄く身も暗く
残れる秋の花を見て
行くへもしらず流れ行く
水に涙の落つるかな

身を朝雲にたとふれば
ゆふべの雲の雨となり
身を夕雨にたとふれば
あしたの雨の風となる

されば落葉と身をなして
風に吹かれて飄り
朝の黄雲にともなはれ
夜白河を越えてけり

道なき今の身なればか
われは道なき野を慕ひ
思ひ乱れてみちのくの
宮城野にまで迷ひきぬ

心の宿の宮城野よ
乱れて熱き吾身には
日影も薄く草枯れて
荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさみしき吾耳は
吹く北風を琴と聴き
悲み深き吾目には
色彩なき石も花と見き

あゝ孤独の悲痛を
味ひ知れる人ならで
誰にかたらん冬の日の
かくもわびしき野のけしき

都のかたをながむれば
空冬雲に覆はれて
身にふりかゝる玉霰
袖の氷と閉ぢあへり

みぞれまじりの風勁く
小川の水の薄氷
氷のしたに音するは
流れて海に行く水か

啼ないて羽は風かぜもたのもしく
雲うに隠かくるゝかさゝぎよ
光ひかりもうすき寒さむ空ぞらの
汝なれも荒あれたる野のにむせぶ

涙なみだも凍こる冬ふゆの日の
光ひかりもなく暮くれれ行いけば
人ひとめも草くさも枯かわれはてて
ひとりさまよふ吾われ身みかな

かなしや酔よふて行く人の
踏ふめばくづるゝ霜しも柱はしら
なを酔よひ泣なく忍しのび音ねに
声こゑもあはれのその歌うたは

うれしや物の音ねを弾ひきて
野の末すえをかよふ人ひとの子こよ
声こゑ調しらべひく手ても凍こりはて
ななに門かどづけの身みの果はてぞ

やさしや年としもうら若わかく
まだ初はつ恋こひのまじりなく
手てに手てをとりて行く人ひとよ
ななにを隠かくるゝその姿すがた

野ののさみしさに堪たへかねて
霜しもと霜しもとの枯かわ草くさの
道みちなき道みちをふみわけて
きたれば寒さむし冬ふゆの海うみ

朝あさは海うみ辺べの石いしの上うへに
こしうちかけてふるさとの
都みやこのかたを望のぞめども
おとなふものは濤なみばかり

暮あはさみしき荒あらい磯いその
潮うしほを染しめし砂すなに伏ふし
日ひの入いるかたをながむれど
湧わきくるものは涙なみだのみ

さみしいかなや荒あらい波なみの
岩いに砕くだけて散ちれるとき
かなしいかなや冬ふゆの日の
潮うしほとともに帰かへるとき

誰たれか波なみ路ぢを望のぞみ見て
そのふるさとを慕ねがはざる
誰たれか潮うしほの行くを見て
この人ひとの世よを惜おしまざる

曆こよみもあらぬ荒あらい磯いその
砂すな路ぢにひとりさまよへば
みぞれまじりの雨あめ雲ぐもの
落おちて潮うしほとなりにつけり

遠とほく湧わきくる海うみの音ね
慣なれてさみしき吾われ耳みみに
怪あやしやもるゝもの音ねは
まだうらわかき野の路ぢの鳥とり

鳴あ呼あめづらしのしらべぞと
声こゑのゆくへをたづぬれば
緑きの羽はもまだ弱よき
それそれも初はつ音ねか驚おどろきの

春はるきにけらし春はるよ春はる
まだ白雪はくせつの積たまりれども
若わか菜なの萌もえて色いろ青あおき
こゝちこそすれ砂すなの上うへに

春はるきにけらし春はるよ春はる
うれしや風かぜに送おくられて
きたるらしとや思おもへばか
梅うめが香かぞする海うみの辺べに

磯辺に高き大巖の
うへにのぼりてながむれば
春やきぬらん東雲の
潮の音遠き朝ぼらけ

春

一 たれかおもはむ

たれかおもはむ 鶯の
涙もこほる冬の日に

若き命は春の夜の

花にうつろふ夢の間と

あゝよしさらば美酒に

うたひあかささん春の夜を

梅のにほひにめぐりあふ

春を思へばひとしれず

からくれなるのかほばせに

流れてあつきなみだかな

あゝよしさらば花影に

うたひあかささん春の夜を

わがみひとつもわすられて

おもひわづらふこゝろだに
春のすがたをとめくれば
たもとにほふ梅の花
あゝよしさらば琴の音に
うたひあかささん春の夜を

二 あけぼの

紅細くたなびけたる

雲とならばやあけぼの

雲とならばや

やみを出でては光ある

空とならばやあけぼの

空とならばや

春の光を彩れる

水とならばやあけぼの

水とならばや

鳩に履まれてやはらかき

草とならばやあけぼの

草とならばや

三 春は来ぬ

春はきぬ

春はきぬ

初音やさしきうぐひすよ

こぞに別離を告げよかし

谷間に残る白雪よ

葬りかくせ去歳の冬

春はきぬ

春はきぬ

さみしくさむくことばなく

まづしくらくひかりなく

みにく、おもくちからなく

かなしき冬よ行きねかし

春はきぬ

春はきぬ

浅みどりなる新草よ

とほき野面を画けかし

さきては紅き春花よ

樹々の梢を染めよかし

春はきぬ

春はきぬ

霞かすみよ雲うみよ動ゆるぎいで

氷これる空そらをあたゝめよ
花かの香かおくる春風はるかぜよ
眠ねれる山やまを吹ふきさませ

春はるはきぬ

春はるはきぬ

春はるをよせくる朝夕あさゆふよ

蘆あしの枯かれ葉はを洗ひひ去るれ

霞あせに酔ひへる雛ひな鶴づるよ

若わかきあしたの空そらに飛とべ

春はるはきぬ

春はるはきぬ

うれひの芹せりの根ねを絶たえて

氷これるなみだ今いまいづこ

つもれる雪ゆきの消きえうせて

けふの若菜わかしほと萌もえよかし

四 眠ねれる春はるよ

ねむれる春はるようらわかき

かたちをかくすことなかれ

たれこめてのみけふの日ひを

なべてのひとのすぐすまに

さめての春はるのすがたこそ

また夢ゆめのまの風情ふうせいなれ

ねむげの春はるよさめよ春

さかしきひとのみざるまに

若紫わぶらの朝霞あさぎり

かすみの袖そでをみにまとへ

はつねうれしきうぐひすの

鳥とりのしらべをうたへかし

ねむげの春はるよさめよ春

ふゆのこほりにむすぼれし

ふるきゆめちをさめいでて

やなぎのいとのみだれがみ

うめのはなぐしさしそへて

びんのみだれをかきあげよ

ねむげの春はるよさめよ春

あゆめばたにの早はやわらびの

したもえいそぐ汝ながあしを

かたくもあげよあゆめ春

たえなるはるのいきを吹き

こぞめの梅うめの香かににほへ

五 うてや鼓つづみ

うてや鼓つづみの春はるの音ね

雪ゆきにうもるゝ冬ふゆの日の

かなしき夢ゆめはとざされて

世よは春はるの日ひとかはりけり

ひけばこぞめの春霞はるあせ

かすみの幕まくらをひきとちて

花はなと花はなとをぬふ糸いとは

けさもえいでしあをやなぎ

霞あせのまくをひきあけて

春はるをうかゞふことなかれ

はなさきにほふ蔭かげをこそ

春はるの台うたなといふべけれ

小蝶こちようよ花はなにたはぶれて

優やさしき夢ゆめをみては舞まひ

酔よめふて羽袖はそでもひらくと

はるの姿すがたをまひねかし

緑きぬのはねのうぐひすよ

梅うめの花はな笠かさぬひそへて

ゆめ静しづかなるはるの日の

しらべを高く歌うたへかし

小詩

くめどつきせぬ
 わかみづを
 きみとくまゝし
 かのいづみ
 かわきもしらぬ
 わかみづを
 きみとのまゝし
 かのいづみ
 かのわかみづと
 みをなして
 はるのこゝろに
 わきいでん
 かのわかみづと
 みをなして
 きみとながれん
 花のかげ

明星

浮べる雲と身をなして

あしたの空に出でざれば
 などしるらめや明星の
 光の色くれなるを

朝の潮と身をなして
 流れて海に出でざれば
 などしるらめや明星の
 清みて哀しききらめきを

なにかこひしき暁星の
 空しき天の戸を出でて
 深くも遠きほとりより
 人の世近く来るとは

朝の朝のあさみどり
 水底深き白石を
 星の光に透かし見て
 朝の齢を数ふべし

野の鳥ぞ啼く山河も
 ゆふべの夢をさめいでて
 細く棚引くしのゝめの
 姿をうつす朝ぼらけ

小夜には小夜のしらべあり
 朝には朝の音もあれど

星の光の糸の緒に
 あしたの琴は静なり

まだうら若き朝の空
 きらめきたる星のうち
 いとく若き光をば
 名けましかば明星と

潮音

わきてながるゝ
 やほじほの
 そこにいざよふ
 うみの琴
 しらべもふかし
 もゝかはの
 よろづのなみを
 よびあつめ
 ときみちくれば
 うらゝかに
 とほくきこゆる
 はるのしほのね

醉歌

旅と旅との君や我

君と我とのなかなれば
酔ふて袂の歌草を
醒めての君に見せばやな

若き命も過ぎぬ間に
樂しき春は老いやすし
誰が身にもてる宝ぞや
君くれなるのかほばせは

君がまなこに涙あり
君が眉には憂愁あり
堅く結べるその口に
それ声も無きなげきあり

名もなき道を説くなけれ
名もなき旅を行くなけれ
甲斐なきことをなげくより
来りて美き酒に泣け

光もあらぬ春の日の
独りさみしきものぐるひ
悲しき味の世の智恵に
老いにけらしな旅人よ

心の春の燭火に
若き命を照らし見よ

さくまを待たで花散らば
哀しからずや君が身は

わきめもふらで急ぎ行く
君の行衛はいづこそや
琴花酒のあるものを
とゞまりたまへ旅人よ

二つの声

朝

たれか聞くらん朝の声
眠と夢を破りいで

彩なす雲にうちのりて
よろづの鳥に歌はれつ
天のかなたにあらはれて
東の空に光あり

そこに時あり始あり
そこに道あり力あり
そこに色あり詞あり
そこに声あり命あり
そこに名ありとうたひつゝ
みそらにあがり地にかけり
のこんの星ともろともに
光のうちに朝ぞ隠るゝ

暮

たれか聞くらん暮の声
霞の翼雲の帯
煙の衣露の袖
つかれてなやむあらそひを
闇のかなたに投げ入れて
夜の使の蝙蝠の

飛ぶ間も声のをやみなく
こゝに影あり迷あり
こゝに夢あり眠あり
こゝに闇あり休息あり
こゝに永きあり遠きあり
こゝに死ありとうたひつゝ
草木にいこひ野にあゆみ
かなたに落つる日とともに
色なき闇に暮ぞ隠るゝ

哀歌

中野逍遙をいたむ

『秀才香骨幾人憐、秋入長安夢愴然、
琴台旧譜墟前柳、風流銷尽二千年』、こ
れ中野逍遙が秋怨十絶の一なり。逍
遙字は威卿、小字重太郎、予州宇和島

の人なりといふ。文科大学の異材なりしが年僅かに二十七にしてうせぬ。逍遙遺稿正外二篇、みな紅心の余唾にあらざるはなし。左に掲ぐるはかれの清怨を写せしもの、『寄語残月休長嘆、我輩亦是艶生涯』、合せかゝげてこの秀才を追慕するのこゝろをとゞむ。

思君九首

中野逍遙

一錨不乖約

一題勿変心

訪君過台下
佇門不敢入

清宵琴響揺
恐乱月前調

千里轉金鶯
忽発頭屋桃

春風吹緑野
似君三两朶

嬌影三分月
渾把花月秀

芳花一朵梅
作君玉膚堆

思君我心傷
中夜坐松蔭

思君我容瘁
露華多似淚

思君我心悄
昨夜涕淚流

思君我腸裂
今朝尽成血

示君錦字詩
忽覚筆端香

寄君鴻文冊
窻外梅花白

為君調綺羅
中有鴛鴦図

為君築金屋
長春夢百祿

贈君名香篋
休將秋扇掩

応記韓寿恩
明月照眉痕

贈君双臂環

宝玉価千金

かなしいかなや同じ世に
生れいでたる身を持ちて
友の契りも結ばずに
君は早くもゆけるかな

すゞしき眼つゆを帯び
葡萄のたまとまがふまで
その面影をつたへては
あまりに妬き姿かな

同じ時世に生れきて
同じいのちのあさぼらけ
君からくれなるの花は散り
われ命あり八重葎

かなしいかなやうるはしく
さきそめにける花を見よ
いかなればかくとゞまらで
待たで散るらんさける間も

かなしいかなやうるはしき
なさけもこひの花を見よ
いとく清きそのこひは
消ゆとこそ聞けいと早く

君し花とにあらねども

かなしいかなや流れ行く
水になき名をしるすとして
今はた残る歌反古の
ながき愁ひをいかにせむ

かなしいかなやする墨の
いろに染めてし花の木
君がしらべの歌の音に
薄き命のひゞきあり

かなしいかなや前の世は
みそらにかゝる星の身の
人の命のあさぼらけ
光も見せでうせにしよ

いな花よりもさらに花
君しこひとにあらねども
いなこひよりもさらにこひ

かなしいかなや人の世に
あまりに惜しき才なれば
病に塵に悲に

死にまでそしりねたまるゝ

かなしいかなやはたとせの

ことばの海のみなれ棹

磯にくだくる高潮の

うれひの花とちりにけり

かなしいかなや人の世の

きづなも捨てて嘶けば

つきせぬ草に秋は来て

声も悲しき天の馬

かなしいかなや音を遠み

流るゝ水の岸にさく

ひとつの花に照らされて

飄り行く一葉舟

四 深林の逍遙、其他

深林の逍遙

力を刻む木匠の

うちふる斧のあとを絶え

春の草花彫刻の

鑿の韻もとゞめじな

いろさまざまの春の葉に

青一筆の痕もなく

千枝にわかるゝ赤樟も

おのづからなるすがたのみ

檜は荒し杉直し

五葉は黒し椎の木の

枝をまじゆる白樫や

樗は茎をよこたへて

枝と枝ともゆる火の

なかにやさしき若楓

山精

ひとにしられぬ

たのしみの

ふかきはやしを

たれかしる

ひとにしられぬ

はるのひの

かすみのおくを

たれかしる

木精

はなのむらさき

はのみどり

うらわかぐさの

のべのいと

たくみをつくす

大機の

梭のはやしに

きたれかし

山精

かのもえいづる

くさをふみ

かのわきいづる

みづをのみ

かのあたらしき
はなにゑひ
はるのおもひの
なからずや

木精

ふるきころもを
ぬぎすてて
はるのかすみを
まとへかし

なくうぐひすの
ねにいでて
ふかきはやしに
うたへかし

あゆめば蘭の花を踏み
ゆけば楊梅袖に散り
袂にまとふ山葛の

葛のうら葉をかへしては
女蘿の蔭のやまいちご
色よき実こそ落ちにけれ
岡やまつゞき隈々も
いとなだらかに行き延びて
ふかきはやしの谷あひに

乱れてにほふふぢばかま
谷に花さき谷にちり
人にしられず朽つるめり
せまりて暗き峽より
やゝひらけたる深山木の
春は小枝のたゝずまひ
しげりて広き熊笹の
葉末をふかくかきわけて
谷のかなたにきて見れば
いづくに行くか滝川よ
声もさびしや白糸の
青き巖に流れ落ち
若き猿のためにだに
音をとゞむる時ぞなき

山精

ゆふぐれかよふ
たびびとの
むねのおもひを
たれかしる

友にもあらぬ
やまかはの
はるのこゝろを
たれかしる

木精

夜をなきあかす
かなしみの
まくらにつたふ
なみだこそ

ふかきはやしの
たにかけの
そこにながるゝ
しづくなれ

山精

鹿はたふるゝ
たびごとに
妻こふこひに
かへるなり

のやまは枯るゝ
たびごとに
ちとせのはるに
かへるなり

木精

ふるきおちばを

やはらかき

青葉のかけに

葬れよ

ふゆのゆめぢを

さめいでて

はるのはやしに

きたれかし

今しもわたる深山かぜ

春はしづかに吹きかよふ

林の簫の音をきけば

風のしらべにさそはれて

みれどもあかぬ白妙の

雲の羽袖の深山木の

千枝にかゝりたちはなれ

わかれ舞ひゆくすがたかな

樹々をわたりて行く雲の

しばしと見ればあともなき

高き行衛にいざなはれ

千々にめぐれる巖影の

花にも迷ひ石に倚り

流るゝ水の音をきけば

山は危ふく石わかれ

削りてなせる青巖に

砕けて落つる飛潭の

湧きくる波の瀬を早み

花やかにさす春の日の

光爛照りそふ水けぶり

独り苔むす岩を攀ぢ

ふるふあゆみをふみしめて

浮べる雲をうかゞへば

下にとゞろく飛潭の

澄むいとまなき岩波は

落ちていづくに下るらん

山精

なにをいざよふ

むらさきの

ふかきはやしの

はるがすみ

なにかこひしき

いはかげを

ながれていつる

いづみかは

木精

かくれてうたふ

野の山の

こゑなきこゑを

きくやきみ

つゝむにあまる

はなかげの

水のしらべを

しるやきみ

山精

あゝながれつゝ

こがれつゝ

うつりゆきつゝ

うごきつゝ

あゝめぐりつゝ

かへりつゝ

うちわらひつゝ

むせびつゝ

木精

いまひのひかり
はるがすみ
いまはなぐもり
はるのあめ

あゝあゝはなの
つゆに酔ひ
ふかきはやしに
うたへかし

ゆびをりくればいつたびも
かはれる雲をながむるに
白きは黄なりなにをかも
もつ筆にせむ色彩いろあやの
いつしか淡く茶を帯びて
雲くれなゐとかはりけり
あゝゆふまぐれわれひとり
たどる林もひらけきて
いと静かなる湖の
岸辺にさける花躑躅はなつづじ
うき雲ゆけばかげ見えて
水に沈める春の日や
それくれなゐ紅の色染めて

雲紫むらさきとなりぬれば
かげさへあかき水鳥の
春のみづうみ岸の草
深き林や花つゝじ
迷ふひとりのわがみだに
深紫ふかむらさきの紅くれなゐの
彩あやにうつろふ夕まぐれ

母を葬るのうた
うき雲はありともわかぬ大空の
月のかげよりふるしぐれかな

きみがはかばに
きゞくあり
きみがはかばに
さかきあり
くさはにつゆは
しげくして
おもからずやは
そのしるし

いつかねむりを
さめいでて
いつかへりこん
わがはゝよ

紅羅あからひく子も
ますらをも
みなちりひぢと
なるものを
あゝさめたまふ
ことなかれ
あゝかへりくる
ことなかれ
はるははなさき
はなちりて
きみがはかばに
かゝるとも
なつはみだるゝ
ほたるびの
きみがはかばに
とべるとも
あきはさみしき
あきさめの
きみがはかばに
そゝぐとも

ふゆはましろに

ゆきじもの

きみがはかばに

こほるとも

とほきねむりの

ゆめまくら

おそろゝなかれ

わがはゝよ

合唱

一 暗香あんかう

はるのよはひかりはかりとお

もひしを

しろきやうめのさかりなるら

む

姉

わかさいのちの

をしければ

やみにも春の

香かに酔よはん

せめてこよひは

さほひめよ

はなさくかげに

うたへかし

妹

そらもゑへりや

はるのよは

ほしもかくれて

みえわかず

よめにもそれと

ほのしろく

みだれてにほふ

うめのはな

姉

はるのひかりの

こひしさに

かたちをかくす

うぐひすよ

はなさへしるき

はるのよの

やみをおそろゝ

ことなかれ

妹

うめをめぐりて

ゆくみづの

やみをながるゝ

せゝらぎや

ゆめもさそはぬ

香かなりせば

いづれかよるに

にほはまし

姉

こぞのこよひは

わがともの

うすこうばいの

そめぐろも

ほかげにうつる

さかづきを

こひのみゑへる

よなりけり

妹

こぞのこよひは

わがともの

なみだをうつす

よのなごり

かげもかなしや

木下川さねがはに

うれひしづみし

よなりけり

姉

こぞのこよひは

わがともの

おもひははるの

よのゆめや

よをうきものに

いでたまふ

ひとめをつゝむ

よなりけり

妹

こぞのこよひは

わがともの

そでのかすみの

はなむしろ

ひくやことのね

たかじほを

うつしあはせし

よなりけり

姉

わがみぎのてに

くらぶれば

やさしきなれが

たなごころ

ふるればいとゞ

やはらかに

もゆるかあつく

おもほゆる

妹

もゆるやいかに

こよひはと

とひたまふこそ

うれしけれ

しりたまはずや

うめがかに

わがうまれてし

はるのよを

二

蓮花舟れんげふね

しはくもこほるゝつゆはは

ちすはの

うきはにのみもたまりけるか

な

姉

あゝはすのはな

はすのはな
かげはみえけり
いけみづに

ひとつのふねに

さをさして

うきはをわけて

こぎいでん

妹

かぜもすゞしや

はがくれに

そこにもしろし

はすのはな

こゝにもあかき

はすばなの

みづしづかなる

いけのおも

姉

はすをやさしみ

はなをとり

そでなひたしそ

いけみづに

ひとめもはぢよ

はなかげに

なれが乳房ちぶさの

あらはるゝ

妹

ふかくもすめる

いけみづの

葉にすれてゆく

みなれざを

なつぐもゆけば

かげみえて

はなよりはなを

わたるらし

姉

荷葉はすはにうたひ

ふねにのり

はなつみのする

なつのゆめ

はすのはなふね

さをとめて

なにをながむる

そのすがた

妹

なみしづかなる

はなかげに

きみのかたちの

うつるかな

きみのかたちと

なつばなど

いづれうるはし

いづれやさしき

三 葡萄ぶどうの樹きのかげ

はるあきにおもひみたれてわ

きかねつ

ときにつけつゝうつ

るこゝろは

妹

たのしからずや

はなやかに
あきはいりひの
てらすとき

たのしからずや

ぶだうばの

はごしにくもの

かよふとき

姉

やさしからずや

むらさきの

ぶだうのふさの

かゝるとき

やさしからずや

にひぼしの

ぶだうのたまに

うつるとき

妹

かぜはしづかに

そらすみて

あきはたのしき

ゆふまぐれ

いつまでわかき

をとめごの

たのしきゆめの

われらぞや

姉

あきのぶだうの

きのかげの

いかにやさしく

ふかくとも

てにてをとりにて

かげをふむ

なれとわかれて

なにかせむ

妹

げにやかひなき

くりごとも

ぶだうにしかじ

ひとふさの

われにあたへよ

ひとふさを

そこにかゝれる

むらさきの

姉

われをしれかし

えだたかみ

とゞかじものを

かのふさは

はかげのたまに

てはふれて

わがさしぐしの

おちにけるかな

四 高樓たかどの

わかれゆくひとををしむとこよ

ひより

とほきゆめちにわれやまとはん

妹

とほきわかれに

たへかねて

このたかどのに
のぼるかな

かなしむなかれ
わがあねよ
たびのころをも
とゝのへよ

姉

わかれといへば
むかしより
このひとのよの
つねなるを

ながるゝみづを
ながむれば
ゆめはづかしき
なみだかな

妹

したへるひとの
もとにゆく
きみのうへこそ
たのしけれ

ふゆやまこえて

きみゆかば
なにをひかりの
わがみぞや

姉

あゝはなとりの
いろにつけ
ねにつけわれを
おもへかし

けふわかれては
いつかまた
あひみるまでの
いのちかも

妹

きみがさやけき
めのいろも
きみくれなるの
くちびるも
きみがみどりの

くろかみも

またいつかみん
このわかれ

姉

なれがやさしき
なぐさめも
なれがたのしき
うたごゑも

なれがこゝろの
ことのねも
またいつきかん
このわかれ

妹

きみのゆくべき
やまかはは
おつるなみだに
みえわかず
そでのしぐれの
ふゆのひに
きみにおくらん

はなもがな

姉

そでにおほへる

うるはしき

ながかほばせを

あげよかし

ながくれなるの

かほばせに

ながるゝなみだ

われはぬぐはん

梭をぎの音ね

梭の音を聞くべき人は今いづこ

心を糸いとにより初めて

涙なみだににじむ木綿もめん縞せ

やぶれし窓まどに身をなげ

暮れ行く空をながむれば

ねぐらに急ぐ村鴉むらかづ

連つれにはなれて飛ぶ一羽

あとを慕もふてかあく

かもめ

波なみに生れて波なみに死ぬ

情なさけの海うみのかもめどり

恋こひの激浪おほなみたちさわぎ

夢ゆめむすぶべきひまもなし

闇くらき潮うしほの驚おどきて

流ながれて帰かへるわだつみの

鳥とりの行衛ゆくへも見えわかぬ

波なみにうきねのかもめどり

流星

門かどにたち出いででたゞひとり

人待ひとまちち顔かほのさみしさに

ゆふべの空そらをながむれば

雲くもの宿しゆくりも捨てはて

何かこひしき人の世よに

流ながれて落おつる星ほし一つ

君と遊あそばん

君と遊あそばん夏なつの夜の

青葉あおはの影かげの下したすゞみ

短みづかかき夢ゆめは結むすばずも

せめてこよひは歌へかし

雲くもとなりまた雨あめとなる

昼ひるの愁うれひはたえずとも

星ほしの光ひかりをかぞへ見よ

楽たのみのかず夜よは尽つきじ

夢ゆめかうつゝか天あまの川がほ

星ほしに仮寝かひねの織姫おりひめの

ひゞきもすみてこひわたる

梭をぎの遠音とほねを聞きかめやも

昼の夢

花はな橘たちばなの袖そでの香かの

みめうるはしきをとめごは

真昼まひるに夢ゆめを見てしより

さめて忘わするゝ夜よのならひ

白日まひるの夢ゆめのなぞもかく

忘れがたくはありけるものか

ゆめと知りせばなまなかに

さめざらましを世よに出いでて

うらわかぐさのうらわかみ

何をか夢ゆめの名残なごりぞと

問とはゞ答こたへん目めさめては

熱き涙のかわく間もなし

東西南北

男ごころをたとふれば

つよくもくさをふくかぜか

もとよりかぜのみにしあれば

きのふは東けふは西

女ごころをたとふれば

かぜにふかるゝくさなれや

もとよりくさのみにしあれば

きのふは南けふは北

懐古

あま 天の河原にやほよろづ

ちよろづ神のかんつどひ

つどひいませしあめつちの

はじめのときを誰か知る

おほがみ 八重かきわけて行くごとく

あまぐも 野の鳥ぞ啼く東路の

うすひ 碓氷の山にのぼりゆき

日は照らせども影ぞなき
あがつま 吾妻はやとこひなきて

熱き涙をそゝぎてし
みこと 尊の夢は跡も無し

やまと 大和の国の高市の

いかづちやま 雷山に御幸して

あまぐも 天雲のへにいほりせる

くろま 御輦のひゞき今いづこ

目をめぐらせばさゞ波や

志賀の都は荒れにしと

むかしを思ふ歌人の

うらみ 澄める怨をなにかせん

かす 春は霞める高台に

たかどの のぼりて見ればけぶり立つ

民のかまどのながめさへ

消えてあとなき雲に入る

こしのへ 冬はしぐるゝ九重の

大宮内のもしびや

さむさは雪に凍る夜の

たつ 竜のころもはいろもなし

むかしは遠き船いくさ
ちしほ 人の血潮の流るとも

今はむなしきわだつみの
まんくとしてきはみなし

むかしはひろき関が原

つるぎに夢を争へど

今は寂しき草のみぞ

ばうくとしてはてもなき

われ今秋の野にいでて

おくやま 奥山高くのぼり行き

都のかたを眺むれば

あゝあゝ熱きなみだかな

しらかべ 白壁

たれかするらん花ちかき

たかどの 高樓われはのぼりゆき

みだれて熱きくるしみを

うつしいでけり白壁に

つば 唾にしろせし文字なれば

ひとしれずこそ乾きけれ

あゝあゝ白き白壁に

わがうれひありなみだあり

四つの袖そで

天馬

をとこの氣息いきのやはらかき

お夏の髪にかゝるとき

をとこの早きためいきの

霰あられのごとくはしるとき

をとこの熱き手の掌ひらの

お夏の手にも触るゝとき

をとこの涙ながれいで

お夏の袖にかゝるとき

をとこの黒き目のいろの

お夏の胸に映るとき

をとこの紅あかき口唇くちびるの

お夏の口にもゆるとき

人こそしらね鳴呼あ恋あの

ふたりの身より流れいで

げにこがるれど慕へども

やむときもなき清十郎

序

老は若わかきは越こしかたに

文ふみに照らせどまればなる

奇くしきためしは箱根山

弥生やよひの末のゆふまぐれ

南あまの天の戸をいでて

よなく北の宿に行く

血くれなゐの深紅の星の影

かたくななりし男さへ

星の光を眼に見ては

身にふりかゝる凶禍まがごとの

天しるしの兆しるしとうたがへり

総鳴そうなきに鳴く鶯うぐひすの

にほひいでたる声をあげ

さへづり狂ねふ音をきけば

げにめづらしき春の歌

春を得知らぬ処をとめ女さへ

かのうぐひすのひとこゑに

枕の紙のしめりきて

人なつかしきおもひあり

まだ時ならぬ白百合の

籬まかきの陰にさける見て

つぐも 九十九の翁おきなうつし世の

こゝろの慾の夢を恋ひ

音ねをだにきかぬ雛鶴ひなづるの

軒のきの榎樹えのきに来て鳴けば

寢覚ねざめの老嫗おきな後の世の

花うてなの台うてなに泣きまどふ

空にかゝれる星のいろ

春さきかへる夏花なつはなや

是これわざはひにあらずして

よしや兆しるしといへるあり

なにを酔ひ鳴く春鳥はるとりよ

なにを告げくる鶴はるどりの声

それ鳥の音ねにトひて

よろこびありと祝ふあり

高き聖ひじりのこの村に

声をあげさせたまふらん

世を傾けむ麗人よきひとの

茂れる賤しづの春草はるぐさに

いでたまふかとのしれど

誰かするらん新星にほしの

まことの北をさししめし

さみしき蘆あしの湖みづうみの

沈める水に映つるとき

名もなき賤の片びさし

春の夜風の音を絶え

村の南のかたほとり

その夜生れし牝の馬は
流るゝ水の藍染の
青毛やさしき姿なり
北に生れし雄の馬の
栗毛にまじる紫は
色あけぼのの春霞
光をまとふ風情あり
星のひかりもをさまりて
噂に残る鶴の音や
啼く鶯に花ちれば
嗚呼この村に生れてし
馬のありとや問ふ人もなし

雄馬

あな天雲にともなはれ
緑の髪をうちふるひ
雄馬は人に随ひて
箱根の嶺を下りけり
胸は踴りて八百潮の
かの蒼溟に湧くごとく
喉はよせくる春濤を
飲めども渴く風情あり
目はひさかたの朝の星
睫毛は草の浅緑
うるほひ光る眼瞳には

千里の外もほがらにて
東に照らし西に入る
天つみそらを渡る日の
朝日夕日の行衛さへ
雲の絶間に極むらん
二つの耳をたとふれば
いと幽なる朝風に
そよげる草の葉のごとく
蹄の音をたとふれば
紫金の色のやきがねを
高くも叩く響あり
狂へば長き鬣の
うちふりうちふる乱れ髪
燃えてはめぐる血の潮の
流れて踴る春の海
噴く紅の光には
火炎の氣息もあらだちて
深くも遠き嘶声は
大神の住む梁の
塵を動かす力あり
あゝ朝鳥の音をきゝて
富士の高根の雪に鳴き
夕つげわたる鳥の音に
木曾の御嶽の巖を越え
かの青雲に嘶きて
天より天の電影の

光の末に隠るべき
雄馬の身にてありながら
なさけもあつくなつかしき
主人のあとをとめくれれば
箱根も遠し三井寺や
日も暖に花深く
さゝなみ青き湖の
岸の此彼草を行く
天の雄馬のすがたをば
誰かは思ひ誰か知る
しらずや人の天雲に
歩むためしはあるものを
天馬の下りて大土に
歩むためしのなからめや
見よ藤の葉の影深く
岸の若草香にいでて
春花に酔ふ蝶の夢
そのかげを履む雄馬には
一つの紅き春花に
見えざる神の宿あり
一つうつろふ野の色に
つきせぬ天のうれひあり
嗚呼鷲鷹の飛ぶ道に
高く懸れる大空の
無限の絃に触れて鳴り
男神女神に戯れて

照る日の影の雲に鳴き
空に流るゝ満潮を
飲みつくすとも渴くべき
天馬よ汝が身を持ちて
鳥のきて啼く鳩の海
花 橘の蔭を履む
その姿こそ雄々しけれ

牝馬

青波深きみづうみの
岸のほとりに生れてし
天の牝馬は東なる
かの陸奥の野に住めり
霞に霑ひ風に擦れ
音もわびしき枯くさの
すゝき尾花にまねかれて
荒野に嘆く牝馬かな
誰か燕の声を聞き
たのしきうたを耳にして
日も暖かに花深き
西も空をば慕はざる
誰か秋鳴くかりがねの
かなしき歌に耳たてて
ふるさとさむき遠天の
雲の行衛を慕はざる

白き羚羊に見まほしく
透きては深く柔軟き
眼の色のうるほひは
吾が古里を忍べばか
蹄も薄く肩瘦せて

四つの脚さへ細りゆき
その 鬣の艶なきは
荒野の空に嘆けばか
春は名取の若草や
病める力に石を引き
夏は国分の嶺を越え
牝馬にあまる塩を負ふ
秋は広瀬の川添の
紅葉の蔭にむちうたれ
冬は野末に日も暮れて
みぞれの道の泥に饑ゆ
鶴よみそらの雲に飽き
朝の霞の香に酔ひて
春の光の空を飛ぶ
羽翼の色の嫉きかな
獅子よさみしき野に隠れ
道なき森に驚きて
あけぼの露にふみ迷ふ
鋭き爪のこひしやな
鹿よ秋山妻恋に
黄葉のかけを踏みわけて

谷間の水に喘ぎよる
眼睛の色のやさしやな
人をつめたくあぢきなく
思ひとりしは幾歳か
命を薄くあさましく
思ひ初めしは身を責むる
強き軛に嘆き侘び

花に涙をそぐより
悲しいかなや春の野に
湧ける泉を飲み干すも
天の牝馬のかぎりなき
渴ける口をなにかせむ
悲しいかなや行く水の
岸の柳の樹の蔭の
かの新草の多くとも
饑ゑたる喉をいかにせむ
身は塵埃の八重葎
しげれる宿にうまるれど
かなしや地の青草は
その慰藉にあらじかし
あゝ天雲や天雲や
塵の是世にこれやこの
轡も折れよ世も捨てよ
狂ひもいでよ軛さへ
噛み砕けとぞ祈るなる
牝馬のこゝろ哀なり

尽きせぬ草のありといふ
天つみそらの慕はしや
渴かぬ水の湧くといふ
天の泉のなつかしや

せまき厩うまやを捨てはてて
空を行くべき馬の身の
心ばかりははやれども
病みては零おつる泪なみだのみ
草に生れて草に泣く

姿やさしき天の馬

うき世のものにことならで
消ゆる命のもろきかな
散りてはかなき柳葉やなぎはの
そのすがたにも似たりけり
波あはゆきに消え行く淡雪あはゆきの

そのすがたにも似たりけり
げに世の常の馬ならば
かくばかりなる悲嘆かなしみに
身の苦悶わづらひを恨み侘うらび
声いななふりあげて嘶いななかん
乱れて長き鬣えんの

この世かの世の別れにも
心ばかりは静和しづかなる
深く悲しき声こゑきけば
あゝ幽遠かすかなる氣息ためいきに
天のうれひを紫の

野末の花に吹き残す
世の名残こそはかなけれ

鶏にはどり

花によりそふ鶏めんどりの
夫つまよ妻めと鳥どりよ燕子かきつばた花
いづれあやめとわきがたく
さも似つかしき風情ふせいあり

姿やさしき牝鶏めんどりの

かたちを恥づるこゝろして
花に隠るゝありさまに
品たれかはりたる夫鳥つまどりや

雄々しくたけき雄鶏おんどりの
とさかの色も艶えんにして
黄くちばしあしけづめなる口くちばし脚あし蹴けづめ爪
尾はしだり尾のながくし

問ふても見まし誰たがために
よそほひありく夫鳥つまどりよ
妻守つまもるためのかざりにと
いひたげなるぞいぢらしき

画はなどりにこそかけれ花鳥の
それにも通ふ一つがひ
霜わびねに侘寝わびねの朝あさぼらけ
雨あめに入日の夕ゆふまぐれ

空に一つの明星の
闇行く水に動くとき
日を迎へんと鶏めんどりの
夜の使つかひを音ねにぞ鳴く

露つゆけき朝の明けて行く
空のながめを誰たれか知る
燃ゆるがごとき紅くれなゐの
雲のゆくへを誰たれか知る

聞もこれより隣なる
声こゑふりあげて鳴くときは
ひとの長眠ねむりのみなめざめ
夜は日に通ふ夢まくら

明けはなれたり夜はすでに
いざ妻鳥つまどりと巢いを出でて
餌えさをあさらんと野に行けば
あなあやにくのものを見き

見しらぬ鶏の音も高に
あしたの空に鳴き渡り
草かき分けて来るはなぞ
妻恋ふらしや妻鳥を

ねたしや露に羽ぬれて
朝日にうつる影見れば
雄鶏に惜しき白妙の
雲をあざむくばかりなり

力あるらし声たけき
敵のさまを懼れてか
声色あるさまに羞ちてかや
妻鳥は花に隠れけり

かくと見るより堪へかねて
背をや高めし夫鳥は
羽がきも荒く飛び走り
蹴爪に土をかき狂ふ

筆毛のさきも逆立ちて
血潮にまじる眼のひかり
二つの鶏のすがたこそ
はおそろしき風情なれ

妻鳥は花を馳け出でて
争鬪分くるひまもなみ
たがひに蹴合ふ蹴爪には
火焰もちるとうたがはる

蹴るや左眼の的それで
羽に血しほの夫鳥は
敵の右眼をめざしつゝ
爪も折れよと蹴返しぬ

蹴られて落つるくれなゐの
血潮の花も地に染みて
二つの鶏の目もくるひ
たがひにひるむ風情なし

そこに声あり涙あり
争ひ狂ふ四つの羽
血潮に滑りし夫鳥の
あな仆れけん声高し

一声長く悲鳴して
あとに仆るゝ夫鳥の
羽に血潮の朱に染み
あたりにさける花紅し

あゝあゝ熱き涙かな
あるに甲斐なき妻鳥は
せめて一声鳴けかしと
屍に嘆くさまあはれ

なにとは知らぬかなしみの
いつか恐怖と変りきて
思ひ乱れて音をのみぞ
鳴くや妻鳥の心なく

我を恋ふらし音にたてて
姿も色もなつかしき
花のかたちと思ひきや
かなしき敵とならんとは

花にもつるゝ蝶あるを
鳥に縁のなからめや
おそろしきかな其の心
なつかしきかな其の情

紅に染みたる草見れば
鳥の命のもろきかな
火よりも燃ゆる恋見れば
敵のこゝろのうれしやな

見よ動きゆく大空の
照る日も雲に薄らぎて
花に色なく風吹けば
野はさびしくも変りけり

かなしこひしの夫鳥の
冷えまさりゆく其姿
たよりの思ふ一ふしの
いづれ妻鳥の身の末ぞ

恐怖を抱く母と子が
よりそふごとくかの敵に
なにとはなしに身をよする
妻鳥のこゝろあはれなれ

あないたましのながめかな
さきの楽しき花ちりて
空色暗く一彩毛の
雲にかなしき野のけしき

生きてかへらぬ鳥はいざ
夫か妻鳥か燕子花
いづれあやめを踏み分けて
野末を帰る二羽の鶏

松島瑞巖寺に遊び葡萄
栗鼠の木彫を観て

舟路も遠し瑞巖寺
冬道遙のこゝろなく

古き扉に身をよせて
飛驒の名匠の浮彫の
葡萄のかけにきて見れば
菩提の寺の冬の日に

刀悲しみ鑿愁ふ
ほられて薄き葡萄葉の
影にかくる、栗鼠よ

姿ばかりは隠すとも
かくすよしなし鑿の香は
うしほにひゞく磯寺の
かねにこの日の暮るゝとも
夕闇かけてたゞずめば
こひしきやなぞ甚五郎

